

論文

少子高齢化が到来した現代中国における「循環するケア」の検討

—費孝通（1910-2005）の提唱した「フィード・バック型」ケアを主軸として—

Consideration on contemporary China with declining birthrate and aging population, and "cycle of care"

— Focusing on the "feed-back style" care advocated by Fēi Xiàotōng (1910-2005) —

磯部 香 (高知大学教育学部)

ISOBE Kaori

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

The "feed-back style" care advocated by the Chinese sociologist Fēi Xiàotōng (1910-2005) represents the parent-child/family relationship based on traditional Chinese thought. Whether the so-called "cycle of care (nurturing and support)" within families is contained in modern China, which is experiencing a rapid and serious declining birthrate and aging population. And will this "feed-back style" care continue to exist in the parent-child relationship in China? The purpose of this paper is to reconsider these questions using existing research.

As a result, the following three issues were identified.

1. With regard to child rearing, the spread of education based on scientific knowledge has created perfect mothers who are able to work, do housework, and raise their children. As a result, nurturing has been externalized to grandparents and parents, which is maintained by the segmentation of nurturing.
2. With regard to the support of the elderly, by law it is the family's duty to support the elderly, and the family is still fully involved in the support of the elderly. However, external support systems are rapidly being developed. Further segmentation of support related to support and care may lead to the separation of some support from the family in the future.
3. Whether the "cycle of care" will be maintained in China in the future. To find out, it is necessary to reconsider the division of care. In other words, it is necessary to investigate who and for what purpose care is being separated from the family, and what effects the separation is expected to have on the family.

I. 問題の所在

現在、中国を含めた東アジア社会全体は急速な少子高齢化が進行している。世界最低出生率国となったのは隣国の韓国である。韓国の合計特出生率は0.81 (2021)¹⁾であり、2018年より1を切り年々下降している状態にある。高齢化率を見れば、総人口における65歳以上の人口が占める割合が世界で一番高いのは日本である。ちなみに日本の高齢化率は28.9% (2022) に達し、2025年には30%に到達すると試算されている²⁾。そして本論文のフィールドとする中国どうかというと、高齢化率は現在13.5% (2021)³⁾であるものの、高齢者の人口で見れば世界最多である。60歳以上は2.67億人、総人口の18.9%、65歳以上は2億人以上、総人口の14.2%を占め、2035年頃には60歳以上が4億人を超え、中度高齢化段階に入り、高齢化の農村部と都市部の地域間格差は広がりを見せ、都市部と農村部の高齢者人口を比べると、都市部の高齢者人口は多いものの、農村部の高齢化率は高い⁴⁾。さらに高齢化の速度を見ると、日本は高齢化率が7% (1970) から14% (1994) に到達するのに14年間であり、世界の中でも速いスピードで進行しているが、中国はそれよりも1年早く2002年から2025年に14%に到達する見込みである⁵⁾。

次に少子化に目をやると、中国の合計特出生率は1.3 (2020)⁶⁾にまで低下し、建国以来過去最低の出生率を記録した。2021年には「二人っ子政策」から「三人っ子政策」に舵を切ったが、少子化に歯止めがかからない状態にある。1979年から2015年12月末まで人口抑制政策として「一人っ子政策」を実施しており、その影響を今もなお色濃く残している。「一人っ子政策」の余波のみならず、目覚ましい経済発展により中国人の教育熱に拍車がかかったことから、家庭での子どもへの教育コストの高騰が少子化の主要因として考えられている⁷⁾。

2022年、中国政府は「一老一小」問題⁸⁾と銘打ち、高齢者と就学前児童に対する公的サービス、例えば、家賃の減免措置、減税、社会保険サービス、金融サービス、医療サービスの拡充等を決定している。高齢者と子どもに関するケアについて連関づけて考えた政策を実施し、少子高齢化と不可分であるケア政策は隣国中国にとっても優先事項となっている。

そこで本研究は、中国ケア研究の基礎研究と位置づけ、著名な中国の文化人類学者あり、社会学者でもある、費孝通 (Fei Xiaotong, 1910-2005) が説いた、中国の伝統的思想に基づく親子・家族関係を示す「フィード・バック型」のケア＝いわゆる親子・家族内の「ケア (養育・扶養) の循環」が、急速かつ深刻な少子高齢化が到来している現代においても内包しているのかどうか、また今後も中国にて存続していくのかについて、既存研究や統計資料を整理しながら再検討を行い、今後の中国にてのケア調査の分析視点を

を構築することにある。

II. 費孝通の説いた中国の「フィード・バック型」モデル

費孝通の中国の親子関係を示す「フィード・バック型」のケアについて説明する。費孝通著『生育制度—中国の家族と社会—』(中国語初版1947, 日訳1985: 306頁)で、中国の特徴とする「フィード・バック型」ケアをこのように述べている。

老人の扶養は、西洋では子どもが負わねばならない義務になっていない。ところが一方中国ではそれは道義上子どもが果たさねばならない責任である。中国の現行の「婚姻法」第十五条と最近通過した新憲法第四九条には、子どもの父母を扶養する義務についての成文化した規定がある。

もし中国と西洋の文化の間にこの違いが確かに存在していると認めるなら、次のような公式によって表わせるのではないだろうか。西洋の公式は $F1 \rightarrow F2 \rightarrow F3 \rightarrow \dots \rightarrow F_n$ で、中国の公式は $F1 \rightarrow F2 \rightarrow F3 \rightarrow \dots \rightarrow F_n$ である (Fは世代を表わし、 \rightarrow は養育、 \leftarrow は扶養を表わす)。西洋においては甲代が乙代を養育し、乙代は丙代を養育する。それは一代ごとのリレーのパターンで、「リレー型」と略称する。中国では甲代を扶養し、乙代は丙代を養育し、丙代はまた乙代を扶養する。下の世代は上の世代に対して必ずフィード・バックしなければならず、「フィード・バック型」と略称する。この二つの型の違いは、前者に子どもの父母に対する扶養の義務がない点である。

・中略・最後に養育空白期が待っており、老夫婦が一つの生活単位を構成し、これがつまり前述の「空巢」である。中国のフィード・バック型を同様に三つの時期に分けてみるなら、第一期は被養育期、第二期は子どもの養育期、第三期は父母の扶養期である。もちろん第二期と第三期には錯綜や重複の状況があり、それによって生活単位の構造は複雑で多様になる。(筆者下線)

とある。中国の「孝道」に則った親子関係は扶養であると言及する。また「上の世代は「不孝に三つあり、子なきは一番なり」を教訓とし、下の子孫は「祖先の名を輝かせる」のを努力目標とする。したがって、中国人は心の中に子孫があり、自分を上下をつなぐ一環とみなす」

(308頁)とある。古来より中国の家族は、孝行を精神的基盤とし、家の継承を意識したシステムであることが分かる。

それが現在まで継続している証左として、中国の法律を概観してみよう。「中华人民共和国宪法（2018年修正文本）」第49条3項⁹⁾には、

婚姻、家庭、母亲和儿童受国家的保护。夫妻双方有实行计划生育的义务。父母有抚养教育未成年子女的义务，成年子女有赡养扶助父母的义务。禁止破坏婚姻自由，禁止虐待老人，妇女和儿童。（筆者下線）

とあり、下線部分には、成人した子どもは、親の扶養・扶助の義務を負うと憲法に明記されている。

また1996年に制定され、2012年、2015年、2018年に改正された「中华人民共和国老年人权益保障法」の「第二章 家庭赡养与扶养（家庭の扶養）」を確認してみても、

第十三条 老年人养老以居家为基础，家庭成员应当尊重，关心和照料老年人。

と、高齢者の扶養は家庭が基礎となり、家族成員は高齢者を尊重し、気遣いを行い、お世話をすることと書かれている。

さらに2012年の改正「中华人民共和国老年人权益保障法」の第18条なのだが、清水由賀の「改正「高齢者權益保障法」と中国の高齢者政策—「頻繁に親元に帰れ」条項に着目して—」（2014）を参考にすると、高齢者の具体的な扶養方法や規範についても法律で規定している。

第十八条 家庭成员应当关心老年人的精神需求，不得忽视，冷落老年人。

与老年人分开居住的家庭成员，应当经常看望或者问候老年人。

用人单位应当按照国家有关规定保障赡养人探亲休假的权利。（筆者下線）

とあるように家族成員は高齢者の精神的ニーズに関心を払い、高齢者を無視、冷遇してはいけない。高齢者と離れて住んでいる家族成員は、日常的に高齢者のもとを訪問するか、あるいは連絡を取らねばならない（下線部分訳）。雇用元は国家の保障に基づき、扶養者の訪問休暇のための権利を保障しなければならないとあり、清水（前掲、2014）はこの18条項を「頻繁に親元に帰れ」と訳し、「政府の役割を強化すると同時に、地域・社会組織・民間企業などによ

る公助・共助・助を拡大しようとしている。その一方で、家族による自助も最大限に活用しようとしており、その役割は法律上においてむしろ強化されている。実際には家族による高齢者はかつてより難しい状況にある」（130頁）ことを示唆し、扶養遂行者を家族成員のみならず、国家、地域、民間へ拡大する一方で家族の扶養規範が法律で強まっていることを指摘している。

つまり、費孝通のフィード・バック型モデルにも示されている「タテ」を中心として捉える親子関係家族関係は、中国社会の持続性を担保する基盤となっており、中華人民共和国建国以降も国の政策に大きく影響を及ぼしており、中国人の「規範・観念・価値観」に入り込んでいることが分かる（麻国慶、2019、90頁）。

また日本の家族社会学者の落合恵美子もアジアの大規模家族調査から中国の家族の特徴を下記のように述べている。落合恵美子等の論文「変容するアジア諸社会における育児援助ネットワークとジェンダー—中国・タイ・シンガポール・台湾・韓国・日本—」（2004：31頁）によれば、

中国系社会では、傍系も含めた親族間の食事や家事の共同が日常的で、日頃から世帯の独立性が低く、子どもの預け合いも援助と言うより当然のこととして行われる。そもそも中国の伝統では子どもの面倒を見るのは祖父母という規範があり、本来育児は母親がするものという意識は希薄だという。老親による育児援助は、後の子どもによる老親扶養とセットだと意識されている。

とある。上記において注目すべきは、法律にも明記されている養育と扶養の義務は、必ずしも親と子のみで交わされるというわけではないという点である。養育と扶養はセットの関係ではあるのだが、祖父母が子ども（孫）の養育を親に代わって「孫育て」を行い、その後、祖父母が年老いた場合は、子どもや孫が親（祖父母）の扶養や介護を行っているのである。費孝通の唱えたフィードバック・モデル型を応用したケア（「隔代教育（養育）」）が現在中国には存在している点にある。いずれにしても、費孝通のフィード・バック型ばかり、それを応用したケアばかり、中国では従来より家族の中でいわゆる「ケアの循環」が行われているのである。

しかし、筆者は、現在の中国において、タテを意識した、親子・家族でのケアを循環の存続は困難に直面しているのではないかと予測をしている。困難に直面していると考え理由は、言わずもがな、急速かつ大規模な少子高

齡化の進行である。急速な少子高齢化は、1979年から2014年まで約36年間続いた人口抑制政策の「一人っ子」政策が起因している。さらに、「一人っ子政策」のみならず、90年代以降の本格的な社会主義市場経済化も要因の一つであろう。「一人っ子政策」と社会主義市場化の双方が連動することで中国は中間層・富裕層の家庭を増加させていった。勘案すれば、大半の中国人にとって子育ては生涯で一度きりとなったことで、子どもへの期待と比例して教育投資が過熱していくことになった。これにより教育コストが過重となり、2016年「二人っ子政策」、そして2021年「三人っ子政策」へと舵を切っているが少子化を緩和する方向には動いてはいないのである¹⁰⁾。

そしてこの少子化の進行は高齢化を深刻なものにしている。現在の中国の高齢化率は13.5% (2021) であるが、2025年には14%、2060年には30%を超えると試算されている(『令和4年度 高齢者白書』¹¹⁾)。特に調査対象地域と選定している遼寧省大連市がある中国東北部を調べてみると、中国東北部の遼寧省・吉林省・黒竜江省の3省は、省全人口の20%以上が60歳以上を占めており、0歳から14歳の人口が14から16%に低下しており、中国の中でも深刻な状態にあることが分かる(前掲、『2021中国統計年鑑』)。

II. 中国の養育・子育て動向

次に本章では中国の子育てに関する現象を既存研究より外観する。

まず前章で少し触れた「隔代教育(養育)」について説明しよう。「隔代教育(養育)」とは、共働きで忙しい子ども夫婦の代わりに祖父母が孫の塾や幼稚園や小学校の送迎等に付き添ったり孫の生活全般の世話や教育を行ったりする、いわゆる「孫育て」の一部である。この「隔代教育(養育)」は中国において珍しい情景ではない。「隔代教育(養育)」による孫の送迎は、中国で生活していればどこでも見かける日常の風景となっている。

ただ中国において注意せねばならないのは、隔代教育(養育)を含めた子どもの養育が血縁関係のみで行われているわけではないという点である。例えば家族外の外部の機関やネットワーク(「家政婦(婦): jiā zhèng fū, 「阿姨: ā yí, 「保姆: bǎo mǔ」¹²⁾ や政策によっても支えられており、さらに中国の都市部に限定されるかもしれないが、義親子関係間での子(孫)育ても見受けられ、日本と比べると、柔軟かつ多様なケアネットワークがある(宮坂靖子, 2007)。中国では、「柔軟な夫婦間の役割分担(状況対応的分担)と親族ネットワークによるインフォーマルな援助、および育児休業や保育園などのフォーマルな援助の双方によって支えられて」(落合等, 2004: 385頁)おり、夫婦・血縁関係を土台としながらも、時には子育てを外部的なことで比較的ゆるやかなかたちで行われているのが特

徴であった。それゆえに、宮坂等の2000年代初めの調査においては、中国には母親が「孤育て」にならないがゆえに育児不安に陥るといった問題はないと結論付けている(前掲, 2007: 113頁)。

だが、ここ近年、中国の子育て(養育)に変化が起きている。

鄭楊は「育児は誰の責任なのか」(2022)の中で、2000年代以降、仕事も家事も子育ても、そして自分磨きも余裕をもって行う母親たち(「スーパーママ」)の出現を言及している。特に「子ども中心主義」のもと、科学的知に基づく子育てが称揚され、子育てが分節化されており、母親たちは「子どもの身体的ケア」、「子どものしつけ、知識、技能」を自身の役割として担っており、その一方で、「子ども(孫)を養う経済力」は祖父母が担う。鄭楊は、上記のような「スーパーママ」が家庭内で母親役割を遂行するためには「献身的な祖父母」の存在が必要不可欠であると説く。ここでも中国にて母親役割の過重と「孤育て」とが連結するとは限らない点が大変興味深い。また鄭(前掲, 2022)は、育児資源が乏しいと近代家族の特徴が表れると指摘している点も特筆すべきであろう。

またその一方で、2021年7月「双減政策」が施行される前の話ではあるが、都市部と限定されるが、高学歴でかつ科学的知の薫陶を受けた「80後後(80年代生まれ)」、「90後後(90年代生まれ)」の父親の中には「仕事も、家事も子育ても教育も」積極的に自分の手で行いたいと考える、いわゆる「スーパーパパ」が出現し始めている。地方都市において欧米の科学的知を根拠とした就学前教育＝「早期教育」が浸透し始めていたこと、そして父親自身が激烈な競争教育を受けてきたことで、競争に勝つためというよりむしろ子どもの幸せや自立につながってほしいという願いから子どもたちを早期教育に子どもたちを通わせていた(磯部・黄, 2019)。またこの調査から分かったのは、鄭楊(2022)が示した調査結果同様、父母のみが子育てに関与しているわけではなく、子育てが大変な時期だけ祖父母に遠くからでも来てもらいサポートをしてもらったり、さらに早期教育専門家の手を借りたりしながら、鄭の言う分節化を行いながら子育てを行っている。

また「スーパーママ」と「スーパーパパ」が同時期に出現するのは一見矛盾しているように捉えられるかもしれないが、そうとは言い切れない。鄭楊(2019)が「中国社会の変化の速さの故に、「伝統家族」、「近代家族」、「ポスト近代家族」といった三つの家族パターンが同時に存在し、三つの女性像が、今の中国女性に凝縮されているようにも見える」(228頁)と言うように、韓国の社会学者 張慶燮(チャン・キョンソプ)が唱えた「圧縮された近代」¹³⁾にかかっている現象が家族の領域で起こっている可能性があるためである。

以上より、現代中国の子育て（養育）に関して言えば、都市部と限定されるかもしれないが、祖父母と父母が役割を分担した「隔代教育（養育）」が行われていることが分かった。この「隔代教育（養育）」は「修正大家族」を含めた「4・2・1家庭」（4人の祖父母、父母、一人っ子）という家族観が基盤となりつつ、外部のサポートも使用していることが分かった。それが、父母の共働きを可能にさせ、さらに父母の理想のライフスタイルを体現させている、スーパーママ／パパ化させる一方で、父母の代わりに祖父母が孫の養育を行うことも同時に維持させることにつながる。それによって祖父母による孫への「溺愛」や甘やかしがしばしば社会問題化する（楊春華, 2018 : 146 頁）。

III. 中国の扶養・介護動向

それでは、扶養・介護はどうであろうか。

前掲したように、現在中国は、60歳以上が2.67億人となり、60歳以上の割合が総人口の18.9%に達し、高齢者が世界一多い国家となっている。

言及するまでもないが約36年間実施された一人っ子政策が高齢化を主に誘引しており、その結果、「未富先老（豊かになる前に老いる）」高齢者、「空巢老人（子どもが実家を離れ、高齢者のみで生活をしている状況）」、「失独老人（子どもが何らかの理由で先立ち、孤立した高齢者）」等の社会問題を生み出している。また前掲の費孝通著『生育制度 中国の家族と社会』（1947；日訳1985）にて「フィード・バック型の基盤は何であろうか。素朴な農民は「養児防老（老後のために息子を育てる）」（308頁）と答えるとあるように、年金等の社会保障が整備されておらず、さらに少子高齢化がここまで深刻でなかった時代において、老後の扶養役割を子ども（息子）に担わせるために子ども（息子）を育てる、家族や親族が高齢者の扶養を行うという習慣があった（現在も農村部には残っているという）。

郭莉莉（2017）は、1950年代に都市部の年金制度の確立から打って変わって、80年代に自由競争原理が導入されたことで年金制度が弱体化していったが、現在、私的扶養から公的扶養に転換を遂げて来ていると述べる。だが、農村部においては年金制度が完備されているとは言い難く、私的扶養のままであること、そして身体的介護制度が本格的に始動したのは2000年代に入ってからであり、「福祉の社会化」、つまり「民間の老人ホーム：施設サービス」、「社区福祉（地域福祉）：在宅サービス」が整備され始めていると説く。

さらに李東輝（2022）は、中国の高齢化の特徴について3点指摘している。1点目、「未富先老（豊かになる前に老いる）」に代表されるように、中国が経済発展を遂げる前に高齢化が進行してしまったこと、2点目には経済発展を比較的

遂げた中国東部の高齢化が進んでおり、高齢化には地域間で格差があること、また農村部と都市部を分けて考える視点も重要で、近年農村部と都市部の高齢化は縮小傾向にはあるものの、都市部に若年層が出稼ぎ等で流出した結果、農村部の高齢化が都市部よりも進んでいること、特に若年層の人口流入により上海や北京の大都市の高齢化率はそれほど高くない状況にあること、そして3点目、高齢化の速度に注視するだけでなく、高齢者人口、日本の総人口近くの高齢者数（1億7630万人）にも注視すべきであることを示唆している。また要介護者は高齢者人口の18.3%であること、その規模も考慮に入れ、今後の推移を捉える必要があると述べる。前掲の郭（2017）と同様、李も2000年代以降、社区（コミュニティ）を基盤とした「私」と「公」を架橋する「共助」の高齢者サービスが急速に拡大をみせていると言及する。

「4・2・1家庭」は、養育方面において一人っ子（一人の孫）に6つのポケットを含めた豊かなサポート資源をもたらしてくれたが、扶養（介護）の側面から捉えると、1人の子ども（孫）の肩に6名の扶養が重くのしかかってくることは想像に難くない。場合によっては婚姻すると、配偶者の義父母親、義祖父母の扶養ものしかかってくる可能性もある。父母や祖父母が望むと望まざるにかかわらず、若者たちに将来の扶養は重責となっている。上記の根拠は、筆者が上梓した「日本・中国・デンマーク若者のケア意識（2022）において今後ケアの当事者となるかもしれない日本・中国・デンマークの3カ国の大学生アンケート調査結果から垣間見える。「親に介護が必要になった場合、子どもが世話をすべき」という質問に対し、中国女性は95.0%、中国男性は94.6%が、親の介護を子どもが行うべきだと思っている。また「高齢の親を世話扶養するのは国の責任だ」という問いに対しては、中国女性82.3%、中国男性74.6%が否定的でそうではないと回答している。本調査では、高学歴若年層において高齢の親の扶養は子どもの役割であるという扶養規範が内在していることが分かった（磯部、2022）。

一方で若年層の子を持つ親世代はどう自身の扶養・介護について思っているのだろうか。前掲の李東輝（2022）は、一人っ子である子どもに扶養してもらいたいと思うより、「老後は子どもたちに頼らず自立したい」（150頁）と考える親が増えていると述べる。自立と扶養が具体的に何を指すかは、今後調査設計で検討しなければならない点ではあるが、李東輝も鄭楊の子育てと同様に扶養・介護が分節化へ傾斜していると述べる。李東輝（前掲、2022）の研究の特筆すべき点は、直井道子（2001）のサポート概念を援用し、「経済的サポート」、「家事サポート」、「身体サポート」、「精神的サポート」と4つの分節化されたサポートに着目し、高齢者が有するネットワーク調査を精緻に行って

いるところにある。李東輝の調査では、国家、行政、NPO、民間企業、親族、友人・知人・隣人の支援を借りながら、原則4つのサポートを網羅して担っているのが家族であることを明らかにしている。だが、今後の高齢化の速度と規模を勘案すれば、この4つのサポートのいずれかが、親子のそれぞれの何らかのライフイベントを契機として薄まったり、断裂し途切れたりするのではないだろうか（と筆者は予測している）。しかし、その逆に子と親の関係性によっては濃くなったり、途切れていたものが再構築されたりする可能性もあるかもしれない。費孝通のフィード・バック型ケアを念頭に置きながら、親子関係と扶養・介護の捉え方の変容について現地調査にて明らかにしたい。

IV. まとめと今後の展開—中国における家族内の「循環するケア」は存続していくのか

以上、現代中国の家族内ケア（養育・扶養）事情について先行研究より概観してきた。それでは最終章にて、費孝通のフィード・バック型のケア＝「循環するケア」は現代中国の家族にて持続しているのか、今後も持続していくのか、その可能性について検討したい。

鄭楊（前掲，2022）が示唆するように、都市部の母親たちは「子どもの身体的ケア」、「子どものしつけ、知識、技能」とみなし、「子ども（孫）を養う経済力」を祖父母への役割としている。さらに鄭楊は「伝統と現代、独立と依頼—中国都市家族の子育てからみた世代間関係の矛盾—

（2021）にて、父母による祖父母への養育役割（隔代教育・養育）がなぜここまで希求されているのか、その要因についてこう述べている。

少子化により伝統家族の扶養義務を果たすだけの家族成員が欠如しており、その一方、近代家族の権利を求めているが、それに応じられる財力、人力も不足し、親世代に依存せざるを得ない（227頁）。

また徐浙寧（2022）は「『家族志向』の子ども親が、幼児期の家族政策のニーズを弱めている」（394頁）と述べ、政策上、養育に関しては家族志向が強いことも分かっている。第2章において中国の養育は、外部や祖父母のサポートの借りながら実施されており、家族の中に養育が閉じ込められているわけではなく、多くの手を借りながら子どもは育てられていることが分かっている。しかし鄭は中国家族の「近代家族」へ傾斜を論及している点は注目すべきであろう。鄭は若い世代が近代家族化を希求するため、祖父母の財力・人力へ依存せざるを得ないという点は大変興味

深い。鄭が主張した子育ての分節化こそが中国の家族が近代家族化の証左であるのかもしれない。養育（子育て）のどの部分が母親の役割とみなし、どの部分を父親や祖父母に任せ、あるいは外部化していくのかといった、母親が主体的に子育てを細分化し精査していくこと、さらにその精査のプロセスこそ、近代家族化への傾斜とみなせるひとつの指標となると考える。

では、費孝通が中国の親子関係の特徴であると述べた扶養に関してはどうであろうか。

前述、及び、前章の若者の介護意識を鑑みると、現下、扶養も家族で何とか維持されているように見える。だが家族内で維持されればされるほど、「身の回りの世話といった誰でもできる仕事という解釈にとどまり、それが高齢者の尊厳を守り、身体介護のみならず、可能な限り自立できる生活を支えていく環境整備や支援方法など専門的な知識や技術を必要とする高い専門性が求められるものであるという理解は非常に希薄」（石田,24頁）になるとあるように、家族の扶養規範が強ければ、専門性の高い介護の知識・技術の導入や高齢者の生活や自立への転化が難しいことを示唆しており、家族主義的扶養規範が扶養（介護）の社会化・外部化を遅らせている点も考慮すべきであろう。

次に中国での扶養調査で考慮に入れねばならないことについても明記しよう。1. 都市部と農村部での家族機能の差を考慮に入れ、都市部と農村部の扶養や扶養に係る親子・家族関係の差異を明確にすることが必要である。2. 李東輝が中国調査で応用した4つの分析視点である「経済的サポート」、「家事サポート」、「身体サポート」、「精神的サポート」がすべて家族内で担保され続けていくのかどうかを都市部と農村部の地域差で捉えるだけでなく、長期的スパンで追跡調査をする必要もある。またこの4つの分析視点で中国の介護を捉えられるのかどうかも再検討すべきである。扶養は子の義務であると憲法に明文化されているものの、深刻かつ急速な少子高齢化の到来によって現下、国主導のもと、扶養・介護が家族以外の組織へ扶養（介護）の分節化が実施されている途上にある。現に郭莉莉の調査（前掲,2017）によれば、都市部の高齢者は年金制度が整備されているため経済的サポートは求めないが、介護については子どもに頼りたいと思っているとある。ただ、自身の子ども数によるところが大きく、一人っ子的場合は子どもに迷惑がかかるため、養老施設への入居を希望していることから、都市部に生活していても、要介護かそうでないか、子どもが一人っ子かそうでないかによって親の子・孫に対する扶養への期待や理想には差異があるという。3. 以上の点から鑑みて、親そして子の、理想や期待と実態の乖離についても重要なパースペクティブである。

現在、中国は大きな社会変動に飲み込まれており、猛スピードで、親子や家族に係る意識規範、政策が制定または

変容している。予測困難に近い状態であることは否めない。だが筆者はこの予測困難な時期であるからこそ、1947年に費孝通の提唱した中国の親子関係を示すフィード・バック型モデル、いわゆる家族内の「循環するケア」のゆくえを再度組上に載せ、立ち返ることで、現代中国の家族・親子関係の実像、そして彼らが抱える問題の一端を浮き彫りにできるのではないかと考える。

【付記】本研究は、科学研究費補助金「基礎研究」(B)「ライフコースと世代」の再編に関する比較家族史の研究(課題番号:20H01567, 研究代表者:山根真理, 愛知教育大学教授)による研究成果の一部である。

【注釈】

- 1) OECD Data, Fertility rates, <https://data.oecd.org/pop/fertility-rates.htm> (閲覧日:2022年11月9日)
- 2) 内閣府, 2022, 『令和4年版 高齢社会白書(全体版)』「高齢化の状況」https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/html/zenbun/s1_1_2.html (閲覧日:2022年11月9日)
- 3) 国家统计局编, 2021, 『2021 中国统计年鉴』「2-4 人口年龄结构和抚养比」<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/2021/indexch.htm> (閲覧日:2022年11月9日)
- 4) 腾讯网「视频回顾9月20日国家卫健委“老龄工作进展与成效”新闻发布会」2022年09月20日 <https://new.qq.com/rain/a/20220921A000XZ00> (閲覧日:2022年11月28日)
- 5) 前掲, 注2参照 ちなみにシンガポールが17年間(2004年-2021年), 韓国が18年間(2000年-2018年)と, 日本や中国を上回る速さで高齢化が到来している。
- 6) 国务院第七次全国人口普查领导小组办公室编, 2020, 『2020 中国人口普查年鉴』「6-4 各地区育龄妇女年龄别生育率」<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/7rp/zk/indexch.htm> (閲覧日:2022年11月9日)
- 7) 腾讯新闻『2021年中国家庭教育消费白皮书』によれば, 年に教育費が1000元以下の家庭は25.92%, 1000元~2000元が18.95%, 2000元~3000元が12.60%, 3000元~5000元が11.97%となっている。またコロナウィルスの影響もあり, 8割の父母がオンライン教育費に割き, 若年層でかつ高学歴の父母ほどオンライン教育費を投じているという。<https://new.qq.com/rain/a/20210714A0325H00> (閲覧日:2022年11月28日)
- 8) 中华人民共和国国务院新闻办公室 国家发展改革委等部

- 門, 2022, 「养老托育服务业纾困扶持若干政策措施」1356号, 2022年8月31日 <http://www.scio.gov.cn/32344/32345/47674/48975/xgzc48981/Document/1729589/1729589.htm> (閲覧日:2022年11月9日)
- 9) 全国人民代表大会, 2018, 『中华人民共和国宪法(2018年修正文本)』第49条3項 <https://flk.npc.gov.cn/xf/html/xf2.html> (閲覧日:2022年11月19日)
 - 10) 中华人民共和国中央人民政府, 2018, 『中华人民共和国老年人权益保障法(2012年改正)』http://www.gov.cn/guoqing/2021-0/29/content_5647622.htm (閲覧日:2022年11月26日)
 - 11) 現在, 教育コストや教育の負担軽減のために2021年7月より「双减文件」が実施されている。双减とは2つを減ずるという意味であり, 日本では「中国語版ゆとり教育」と報道されることがある。1つは小中学校の宿題を軽減させること, 無料にて全国でオンライン授業が受けられるようにすること, 2つ目は小中学生の学校外教育=塾に通うのを制限すること。また就学前教育も禁止することとあり, 中国社会の子どもたち, 保護者たちの教育における, 心身, 及び, 経済的負担を軽減させる目的があると言われている。「中共中央办公厅 国务院办公厅印发《关于进一步减轻义务教育阶段学生作业负担和校外培训负担的意见》」中华人民共和国教育部 HP http://www.moe.gov.cn/jyb_xxgk/moe_1777/moe_1778/202107/t20210724_546576.html (閲覧日:2022年11月19日)
 - 12) 『令和4年版 高齢社会白書(全体版)』によれば, 日本の高齢化率は28.6%(2022), 韓国は15.8%(2022)である。https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/html/zenbun/s1_1_2.html (閲覧日:2022年11月26日)
 - 13) 『家政婦(婦):jiā zhèng fù』はそのままであるが, 「阿姨:ā yí」は元々おばさんという意味であるが, 家政婦のように家事や育児をしてくれる女性, 「保姆:baǒ mǔ」はベビーシッターのことを指す。家政婦紹介所等で派遣してもらった場合もあるが, 人づてで個人的に雇用することもある。
 - 14) 張慶燮(柴田悠訳)「個人主義なき個人化—「圧縮された近代」と東アジアの曖昧な家族危機」落合恵美子編『親密圏と公共圏の再編成 アジア近代からの問い』京都大学出版会 pp.39-65.
- 【引用文献・資料】
- 石田路子, 2013, 「中国における高齢者介護サービスの現状と課題」『城西国際大学紀要』21(3), pp.1-29.
- 磯部香・黄一峰, 2019, 「現代中国における「早期教育」の隆盛は家族・ジェンダーをどのように変容させるのか—新たな父親像の出現に着目して—」『アジア女性』

- 28, pp.19-37.
- 磯部香, 2022, 「日本・中国・デンマークの若者のケア意識」宮坂靖子編著『ケアと家族愛を問うー日本・中国・デンマークの国際比較ー』, 青弓社, pp.19-57.
- OECD Data, Fertility rates,
<https://data.oecd.org/pop/fertility-rates.htm>
 (閲覧日: 2022年11月9日)
- 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子・周維宏・藤田道代・斧出節子・木脇奈智子・洪上旭, 2004, 「変容するアジア諸社会における育児援助ネットワークとジェンダーー中国・タイ・シンガポール・台湾・韓国・日本ー」『The Japanese journal of educational research』71 (4), pp.382-398.
- 落合恵美子, 2008, 「グローバル化する東アジアの低出生率」『学術の動向』13 (4), pp.27-34.
- 郭莉莉, 2017, 『日中の少子高齢化と福祉レジーム 育児支援と高齢者扶養・介護』北海島大学出版会
- 国家统计局编, 2021, 『2021 中国统计年鉴』「2-4 人口年龄结构和抚养比」
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/2021/indexch.htm> (閲覧日: 2022年11月9日)
- 国务院第七次全国人口普查领导小组办公室编, 2020, 『2020 中国人口普查年鉴』「6-4 各地区育龄妇女年龄别生育率」
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/7rp/zk/indexch.htm>
 (閲覧日: 2022年11月9日)
- 清水由賀, 2014, 「改正「高齢者權益保障法」と中国の高齢者政策ー「頻繁に親元に帰れ」条項に着目してー」『社会学研論集』Vol. 23, pp. 121-133
- 全国人民代表大会, 2018, 『中华人民共和国宪法 (2018 年修正文本)』第 49 条 3 項 <https://flk.npc.gov.cn/xf/html/xf2.html>
 (閲覧日: 2022年11月19日)
- 中华人民共和国教育部, 2021, 「中共中央办公厅国务院办公厅印发《关于进一步减轻义务教育阶段学生作业负担和校外培训负担的意见》」
http://www.moe.gov.cn/jyb_xxgk/moe_1777/moe_1778/202107/7t20210724_546576.html (閲覧日: 2022年11月19日)
- 中华人民共和国国务院新闻办公室国家发展改革委等部门, 2022, 「养老托育服务业纾困扶持若干政策措施」1356 号, 2022年8月31日
[15http://www.scio.gov.cn/32344/32345/47674/48975/xgzc48981/Document/1729589/1729589.htm](http://www.scio.gov.cn/32344/32345/47674/48975/xgzc48981/Document/1729589/1729589.htm) (閲覧日: 2022年11月9日)
- 中华人民共和国中央人民政府, 2018, 『中华人民共和国老年人权益保障法』(2012 年改正)
http://www.gov.cn/guoqing/2021-0/29/content_5647622.htm
 (閲覧日: 2022年11月26日)
- 張慶燮(柴田悠訳)「個人主義なき個人化ー「圧縮された近代」と東アジアの曖昧な家族危機ー」落合恵美子編『親密圏と公共圏の再編成 アジア近代からの問い』京都大学出版会, pp.39-65.
- 鄭楊, 2019, 『転換期を生きる中国都市家族の育児と女性たち』大阪公立大学共同出版会, pp.1-260.
- 鄭楊, 2021, 「伝統と現代, 独立と依頼ー中国都市家族の子育てからみた世代間関係の矛盾ー」比較家族史学会監修・小池誠・施利平編著『家族研究の最前線⑤ 家族のなかの世代間関係子育て・教育・介護・相続』, 日本経済評論社, pp.201-232.
- 鄭楊, 2022, 「育児は誰の責任なのか」宮坂靖子編著『ケアと家族愛を問うー日本・中国・デンマークの国際比較ー』, 青弓社, pp.99-143.
- 腾讯新闻, 2021, 『2021 年中国家庭教育消費白皮書』
<https://new.qq.com/ain/a/20210714A0325H00> (閲覧日: 2022年11月28日)
- 腾讯网「视频回顾 9 月 20 日国家卫健委“老龄工作进展与成效”新闻发布会」2022年09月20日
<https://new.qq.com/ain/a/20220921A000XZ00> (閲覧日: 2022年11月28日)
- 内閣府, 2022, 『令和 4 年版 高齢社会白書 (全体版)』
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2022/html/zenbun/s1_1_2.html (閲覧日: 2022年11月26日)
- 麻国慶(舒亦庭訳), 2019, 「文化の持続性, 民族の融合とグローバルの視点から見る中国の家族」韓敏編『家族・民族・国家ー東アジアの人類学的アプローチ』風響社, pp.87-106.
- 徐浙寧, 2022, (織田暁子・陳玲・平井晶子訳)「第 17 章 中国における幼児期の発達に関する家族政策 一九八〇ー二〇〇八」平井晶子・落合恵美子・森本一彦編『リーディングス アジアの家族と親密圏』第 2 巻, 有斐閣, pp.379-400.
- 費孝通(横山廣子訳), 1985, 『生育制度 中国の家族と社会』東京大学出版
- 宮坂靖子, 2007, 「中国の育児ージェンダーと親族ネットワークを中心にー」落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編『アジアの家族とジェンダー』勁草書房, pp.100-120.
- 李東輝, 2022, 「中国の高齢者は誰がケアするのかー大連市での調査を例に」宮坂靖子編著『ケアと家族愛を問うー日本・中国・デンマークの国際比較』, 青弓社, pp.114-182
- 楊春華, 2018, 『中国における「一人っ子」の家庭教育の特質ー親の教育意識構造をめぐってー』青山社, pp.1-365.